

# 2003年度活動報告

- 近世学問都市京都の総合研究プロジェクト -

桂島 宣弘、石黒 衛

**Abstract:** The modern city, Kyoto is well known as one of the three capital cities in Japan, however, it has been only focused on as a place where historical industries, emperors, temples and shrines exist so far. On the other hand, although there are many researchers and researches from Kyoto such as Syushigaku and Kyogaku school, Yamazaki Anzai school, Jinzai Ito and Baigan Ishida, there exists very few comprehensive studies on the academic city, Kyoto which produced many talented researchers as above says.

This project aims at a comprehensive research on the academic city, Kyoto, without sticking to the individual studies and researchers. Concretely, while paying notice to the academic status of Kyoto in Asia, we are to compare the distribution of learning school, network, transformation and friendship of disciples not only between Edo and Osaka but also Kiyokuni and Korean dynasty, and then reveal the core of the academic characteristics in Kyoto studies.

## , はじめに

本プロジェクトは、以下の三つの軸に従って研究が進められるものである。

日本・中国・韓国の研究者を中心とした学術研究ネットワークを構築し、学問都市京都研究の拠点形成を図る。

近世学問都市京都に関わる学者・文人等のデータを収集分析し、近世京都知識人データベースを作成。

東アジアにおける近世京都の解明(典籍のネットワーク、知識人の交流)

この軸に従って、本年度は以下のように研究が進められた。

## , 2003年度研究概要

### - 1 研究会・国際学術研究会の開催

本プロジェクトでは、近世学問都市京都研究の拠点として、各分野の研究者との交流・情報交

換をはかるべく、近世学問都市研究会を組織し、研究報告会を開催した。

近世学問都市京都研究会は、関西を中心とした大学・研究所の研究者数十名の参加者をえて、有意義な議論が展開された。

第一回研究会では、桂島宣弘(立命館大学)「近世学問都市京都研究の課題～石門心学を中心に」、石黒衛(COE特別研究員)「近世学問都市京都研究の課題～儒学を中心に」の二報告がなされ、近世学問都市京都研究の現状と課題が議論され、今後の研究目標が確認された。

第二回研究会では、尾形優子(立命館大学院)「堂上公家と知識人の交流でみる京都」の報告がなされ、近世京都における朝廷とその周辺に位置する知識人の重要性が指摘され、従来看過されがちであった堂上歌壇の問題が議論された。

第三回研究会では、宮川康子(京都産業大学)「近世公家知識人の神道言説 野宮定基を中心に」の報告がなされ、朝廷における神道言説を中心にした大坂懷徳堂知識人、神道者、儒者、公家等の交流が明らかにされ、近世学問都市京都の重層性が議論された。

また、本プロジェクトでは東アジアにおける京都の学問的地位という観点から、東アジア各国の研究者、特に韓国・中国の研究者との学術交流を図るべく、二度にわたる国際学術研究会を開催した。

10月25日、立命館大学において、李元範(大韓民国東西大学校教授)、趙誠倫(大韓民国済州大学校教授)を招聘し、2003秋季国際学術研究会を開催した。報告者と論題は以下の通り。

李元範(大韓民国東西大学校教授)

「韓国から見た日本の文化」

趙誠倫(大韓民国済州大学校教授)

「韓国から見た日本の社会」

石黒衛(COE特別研究員)

「朝鮮朱子学と京都の学問」

桂島宣弘(立命館大学教授)

「近世東アジアの思想をめぐる諸問題」

本学術研究会は、全国の大学・研究所から五十名ほどの参加者をえて、東アジアにおける学問都市京都の問題点が、歴史学、宗教学、思想史学等、日韓の様々な学問分野の研究者によって議論され、有意義な国際学術交流の場となった。なお、本研究会の成果は、別冊として刊行予定である。

2004年1月29日、「十九世紀東アジアの思想と哲学 京都のネットワークを中心に」という主題のもと、再度の国際学術研究会を開催した。報告者と論題は以下の通り。

李賢九(韓国哲学思想研究会)

「中国における西洋学術翻訳書における近代学術用語の形成過程の諸問題 京都と比較して」

洪瑛斗(韓国哲学思想研究会)

「韓国における哲学思想典籍の諸問題」

この研究会には、韓国からソウル大学、慶南大学、漢陽大学、梨花女子大学などから約二十名の研究者の参加を得て、日本側の研究者との意見交換が行われた。

## - 2 近世京都知識人名鑑

本プロジェクトでは、以下の研究項目に従って

近世京都知識人名鑑作成のためのデータ収集分析作業を推進中である。

「近世学問都市京都研究研究項目」

1, 中世から近世へ

禅林の学問、家学、歌学、京都の出版、近世前期(藤原惺窩と林羅山)、町衆の学問

2, 17世紀(寛永期以降)

松永尺五と講習堂、木下順庵と木門十哲、山崎闇斎と崎門派、伊藤仁斎・東涯と堀川学派、陽明学、神道、和学、霊元院歌壇、本草学と古医方

3, 18世紀(元禄期以降)

石田梅岩と石門心学、古義堂と白話小説、漢詩界(江村北海)堂上歌壇と地下歌壇、

4, 19世紀(寛政期以降)

柴野栗山、西山拙斎、皆川淇園、猪飼敬所など、海保青陵、京都学問所建設計画、教諭所、寺子屋、医学と蘭学(小石元俊など)、国学(富士谷御杖、香川景樹など)、温古会、頼山陽門人

5, 幕末

神祇伯白川家、高山彦九郎と蒲生君平、学習院、反逆の四天王(梅田雲浜、頼三樹三郎、梁川星巖など)

東アジアと近世京都

朝鮮出兵と京都儒学(李退溪学、姜沆など)

明亡命知識人(明清王朝交代)と京都文化

朝鮮通信使と京都の学問(雨森芳洲など)

現在、この研究項目に従って、千名強の学者・文人等をリストアップし、その伝記、人脈と学派、学説、著書等のカード化作業を行っている。

## - 3 典籍調査

本プロジェクトでは、東アジアにおける近世京都の解明のため、典籍のネットワークに注目し、その調査・資料収集を行った。本年度は北京大学図書館所蔵の和刻本を中心に調査を行い、典籍の種類、所蔵状況、流通過程等の解明に努めた。

北京大学図書館には、1409種8801冊の日

本版古書が所蔵されており、その多くが李氏蔵書に属している。李氏蔵書とは、中国近代の蔵書家として知られる李盛鐸(1859 - 1934)によるコレクションであり、ジャーナリスト岸田吟行(1833 - 1955)と交流のあった彼が、明治維新以後に吟行を通じて収集したものである。

北京大学図書館所蔵の和刻本は、元久元年(1204年)の題字を持つ『成唯識論述記』(唐、釈観基著、日本古刻古抄配本)を最古のものとし、日本の中世から近世にかけての典籍史を知る上で格好の材料を与えてくれるものである。

本調査では、近世期に翻刻された和刻本を中心に写真撮影等、資料収集を行い、その中でも特に当時の人々による書き込み等の残されている典籍の発掘に力を注いだ。たとえば図1は「聖徳太子伝暦」(三巻、平氏撰。寛永五年八月板木屋勝兵衛開板)の書き込みであるが、これらの書き込みは、思想的にも興味のある資料として注目される。



図1「聖徳太子伝暦」(北京大学図書館蔵)

本蔵書には、それぞれの書物の入手先や状況を記した書き込みのあるものも存在する。また蔵書印の確認できる典籍も多く、これらを分析することによって、近世京都はもとより近世日本の各地における知の集積過程とその実態、また近代におけるその変容をも明らかにすることが可能となろう。

このほか、上海図書館での和刻本の調査も実施したが、その資料については現在整理中である。

## 「おわりに

以上の研究経過をふまえて2004年度も、近世学問都市研究会を継続し、学問都市京都の特質を明らかにしていく。とりわけ、秋季国際学術シンポジウムを中国、韓国の研究者を交えて開催し、学術交流の拠点として、本プロジェクトが機能するように図っていく。現在、以下の内容で開催することが計画されている。

### 基調講演

「京都の学問の特質 藤樹・闇斎・仁斎」

高橋 文博 岡山大学文学部長

### 研究報告

郭連友 北京日本学研究中心 副教授

龔穎 中国社会科学院 研究員

成海俊 韓国蔚山大学 助教授

石黒衛 本学COE特別研究員

この学術シンポジウムの成果については、来年度制作予定のホームページにて公開すると共に、学術誌としての刊行も計画している。

また近世知識人名鑑のデータベース化作業を継続し、その完成を目指すともに、東アジアにおける典籍ネットワークの解明に努めるものである。